

平成29年4月13日(木)

老球の細道319号

「ホンモノ」と「ニセモノ」

会津バスケットボール協会 室井 富仁

バスケットボールの名門能代工業高校の前々監督加藤広志氏には面白いエピソードがある。他人から聞いた話であるが、現役のコーチだった頃デパートに行くとき必ず宝石売り場に出向いたという。奥さんに指輪をプレゼントするためではない。ホンモノの宝石の輝きを観察して、ホンモノとニセモノを見極める眼力を養ったという。流石に全国制覇30回を越える名將は違う。

平成7年福島国体を控えた頃、私はコーチの勉強で韓国仁川市の「仁聖学園」に練習見学に行ったことがある。帰りソウルに寄り、偽ブランド品で有名なお土産店に寄って「ハンティングワールド」の財布を2つ買った。なんと1つが日本円で5千円だった。普通5万円以上する高級品である。ニセモノだろうと店員に言ったら絶対本物だと言うので信じて買って来た。日本に帰って来て知人に見せびらかしていたら、目利きの知人がニセモノであることを教えてくれた。「やはり！」とがっかりして当時中学生だった息子達にくれたが、息子達も最後はどこかに紛失してしまった。ニセモノは去り、ホンモノは残る。

バスケットボールにおいては、上っ面だけのニセモノプレーヤーは、今は良くても後が伸びない。ホンモノの光り輝くもの(人間性)を持っている者は、今はダメであっても将来の伸びしろは大きい。長年のコーチ生活から得た教訓である。だからコーチはホンモノとニセモノの違いを見極める眼を持たなければならない。インスタントコーヒー「ネスカフェ・ゴールドブレンド」も指導者も共通である。

ミニ、中学までは親のDNAや恵まれた練習環境、熱心な指導者の存在で光り輝ける。ニセモノでも可能である。しかし、高校以降はそうはいかない。本人の努力が何よりもものを言う。その努力を支えるのがホンモノの人間性である。指導者はホンモノかニセモノかを見極めた上で指導にかかれないと裏切られることもある。やる気があって能力もあるかに見えたニセモノは突然リタイアする。ものすごく期待していたのに。能力もなく目立たないホンモノはコツコツ努力を重ね国体選手になる。そのような伝説は数多くある。

ホンモノかニセモノかを見極める試金石は宝石店に行かなくてもわかる。「挨拶」を見ればいい。誰でも自分の部活ではきちんと挨拶をする。指導者、先輩、お客様に。しかし、その挨拶が、えてして自分たちの部内だけという狭いテリトリーで終わっていることが多い。上っ面だけの挨拶、身内だけの挨拶に満足しているのはニセモノである。

部活で選手がコートに来ると、指導者の所まで走ってきて気をつけをしながら挨拶をする。それに気分を良くしていると他の場面でがっかりさせられる。コート内できちんと挨拶をする生徒でも、クラスや授業においても同じように挨拶できる生徒は多くはない。部活をリタイアしたり引退したりした後でも自然に挨拶ができる生徒もまた多くはない。ましてや、部活以外の先生に対してや、部活以外の環境におかれても部活動中と同じように自然な挨拶ができる選手は何人いるのだろう。ホンモノ中のホンモノの挨拶が・・・。

挨拶一つでもホンモノとニセモノの違いが如実に表れる。ホンモノは伸びる。ニセモノは伸びないし、リタイアすることも多い。指導者は表面だけの、狭いテリトリーだけの挨拶で満足してはいけない。ホンモノの挨拶を指導できてこそホンモノの指導者である。